

2024. 6. 9 (日) 使徒16:6~10

16:6 それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フリュギア・ガラテヤの地方を通過して行った。

16:7 こうしてミシアの近くまで来たとき、ビティニアに進もうとしたが、イエスの御霊がそれを許されなかった。

16:8 それでミシアを通過して、トロアスに下った。

16:9 その夜、パウロは幻を見た。一人のマケドニア人が立って、「マケドニアに渡って来て、私たちに助けてください」と懇願するのであった。

16:10 パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。彼らに福音を宣べ伝えるために、神が私たちを召しておられるのだと確信したからである。

<説教>

パウロとバルナバが第2回伝道旅行に出かけようとしたとき、マルコと呼ばれるヨハネと一緒に連れて行くかどうかでパウロとバルナバの意見が激しく対立し、ついに二人は別れて行動することになってしまいました。パウロはシラスと共に〈シリアおよびキリキヤを通り〉(15:41)、〈デルベに、そしてリステラに行〉(16:1)きました。パウロはそこでテモテに出会い、〈そこにいるユダヤ人たちのために、彼に割礼を受けさせ〉(16:3)、彼を旅の仲間に加えました。パウロの同労者となったテモテはその後パウロと共に福音宣教に励むだけでなく、パウロがある場所を去った後もそこにとどまって働きを続けたり、また時にはパウロの代理、使者としても用いられます。そしてパウロの手紙(Ⅱコリント、ピリピ、コロサイ、Ⅰ・Ⅱテサロニケ、ピレモン)の共同発信者にもなる、大事な働き人となります。このように、人の目には残念で不幸と見えることの中で、〈すべてのことがともに働いて益となる〉(ローマ 8:28)ように神が働いてくださいました。そんなパウロ、シラス、テモテたちの働きを通して〈諸教会は信仰を強められ、人数も日ごとに増えて〉(16:5)いきました。

パウロたちはデルベ、リステラ、そしてイコニオンに行き、おそらくピシディアのアンティオキヤにも行ったと思われます(ここまでおおよそ西方向に進んで来ました)。そして更に西に行くと〈アジア〉(6)州(第一の都市がエペソ)でした。パウロたちはそのように進もうと考えたのかもしれませんが。しかし彼らは急に北に向きを変えて〈フリュギア・ガラテヤの地方を通過して行〉(6)き、〈アジア〉を通らないで〈ミシア〉地方の〈近くまで来〉(7)ることになりました。なぜかというところ(彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられた)〈(6)からでした。そして今度は〈ミシア〉の北東方向にあった〈ビティニア〉に〈進もうとしたが、イエスの御霊がそれを許されなかった〉(7)の)でした。それでそこから再び西に向きを変え、〈ミシアを通過して、トロアスに下った〉(8)の)でした。〈トロアス〉は〈ミシア〉地方の、エーゲ海に面した港町でした。そのエーゲ海を挟んで対岸に〈マケドニア〉(9)州(首都はテサロニケ)がありました。トロアスで〈その夜、パウロは幻を見〉(9)ました。そして〈パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。彼らに福音を宣べ伝えるために、神が私たちを召しておられるのだと確信したからである〉(10)とルカは書いています。

パウロ（とバルナバ）が第2回伝道旅行に出ようと考えた理由は、1回目のときに福音宣教した町の教会、兄弟たちの様子を見、彼らを励まし、またエルサレム会議の結果をも伝えるためでした。その地域は現在のトルコのほんの一部、そして地中海のキプロスといったほんの限られた狭い地域でした。そしてパウロがバルナバと分かれた後に行こうとした地域も、なお今のトルコの中央から西の地域で、依然として（現在の）アジアに限られていました。しかし神はパウロたちを今のギリシャにお遣わしになり、こうして主イエス・キリストの福音は（現在の）アジアを出てヨーロッパにも伝えられることになりました。

そこにはパウロたちの、「父なる神、主イエス・キリスト、聖霊」、即ち三位一体の神に対する完全な従順の姿がありました。パウロたちは〈アジア〉州でみことばを語ることを聖霊によって禁じられた（または「妨げられた」）ときに、その聖霊のみこころに従って、アジアには行かず、フリュギア・ガラテヤの地方を通って行きました。「みことばを語るのだから、アジアでもいいじゃないですか」「どうしてアジアでみことばを語ってはいけないんですか？」などと文句を言った様子はありません。ビティニアに進もうとしたときに、イエスの御霊がそれを許されなかったときにも、彼らは当然そこでもみことばを語るつもりだったはずなので、「どうしてビティニアではだめなんですか？私たちはビティニアに進みたいのに」と文句を言った様子はありません。確かに「なぜ、どうして？」という位の疑問はあったと思いますが、とにかく彼らは〈聖霊〉、〈イエスの御霊〉のみこころにかなわないことと「示された」ことに聞き従ったのでした。

なお、この〈聖霊〉、〈イエスの御霊〉の「示し」が実際にどのようにあったのかはわかりません。パウロの回心のときのように、彼らに主が現れて直接声をおかけになったのか、あるいは聖書を読んでいてどこかの箇所から示されたのか、更にはパウロたちの側の事情で何が予定を変えざるを得ない事が起きたのかもかもしれません。例えばパウロか誰かが病気になったとか（10節で「私たち」と書かれて、筆者の「医者」ルカが登場するのはそのためではないか、と考える人もいます）。実際、パウロのガラテヤ伝道のきっかけは、パウロの肉体の弱さにありました（ガラテヤ 4:13）。現代の私たちに神が直接現れてみことばをもってお命じになるということはめったにないと思います。ですから私たちが「聖霊の語りかけ、導き」の受け方は、何と言っても聖書のみことば（その解釈も含めて）によること、そして確かに私たちの身に、また私たちの周囲（の人や事）に起こることによって（これもまたその解釈を含みますが）になるでしょう。

さて神の3回目の示しは前の2回よりも具体的に「幻」によってだったことをルカは記しました。〈パウロがこの幻を見たとき〉初めて、これまでの「禁止、妨げ」「不許可」の意味、理由が分かりました。「マケドニアに渡って、マケドニアの人々に福音を宣べ伝えるために神が私たちを召しておられるのだと確信した」のです（10）。この「確信する」とは「いろいろな証拠を解釈して一つの結論を出す」という意味です。そのときは、またこれまでは分からなかった（「御霊によって」とか「イエスの御霊が」ということさえも）。けれども、今、振り返って見て、あのときアジア州にもビティニアにも行くことができなかったのは、具体的な事情も含めて、〈聖霊〉〈イエスの御霊〉〈神〉のみこころの中での出来事だったと分かった、ということです。「今の私たち」に対する神の〈召し〉は〈ただちにマケドニアに渡ること〉であり〈彼らに福音を宣べ伝える〉ことだと〈確信した〉のです。その〈確信〉はもちろん〈聖霊〉〈イエスの御霊〉〈神〉の力によるものでした。

どこを通り、どの方向に行くべきか、アジア州か、ビティニアかトロアスか、それは旅を始めた時には分からなかった神の「隠されたみこころ」でした。パウロたちのすべきことはその時々「示された」神のみわざ、みこころに従うことでした。私たちも同じです。隠されていること、分からないことについては「わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください」(マタイ 26:39)と、また「どうか聖書のみことばによって、また人や状況をも用いて、みこころのときにお示してください。私はあなたに従います」と聖霊により、主イエスの御名によって神に祈るほかありません。自分の願い通りになってもならなくても、そのなさることの〈すべて時にかなって美しい〉(伝道 3:11)、最善なる神に全く信頼し、お従いすることが大事です。聖霊の格別なる助け、導きが私たちには必要なのです。〈天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます〉(ルカ 11:13)。日々祈り求めましょう。みことばと聖霊の導きに従いましょう。